

課題

かなしみ

大切な壊れ物

人物

武藤晴美 (47)

笹間美津 (74) 晴美の母親

笹間博 (78) 晴美の父親

武藤真澄 (47) 晴美の夫

武藤亮輔 (16) 晴美の息子

菊田久代 (51) 晴美の陶芸仲間

笹島琴音 (42) グループホーム

ひまわり畑マネージャー

○ 笹間家・リビング

テレビが大きな音を出している。その前に向かい合わせに置いてある一人掛け用ソファーに笹間博(78)がどっしり座っている。三人掛け用ソファーの隅には、笹間美津(74)が正座している。美津の表情はどこか焦点があつていないようなぼんやりした感じがある。突然キッチン奥から悲鳴のような声が聞こえる。武藤晴美(47)がドタドタと足音を立ててキッチンから現れる。

晴美「お父さん何これ？ちゃんと説明して」

晴美が突き出した右手に、下半分が焦げ溶けてなくなっているポットらしきものが下がっている。

笹間「・・・それは・・・母さんがやかんと間違えて火にかけちゃったんだよ」

晴美「ね、もう無理だから。認めたくないのはわかるけど、お母さんの病状、かなり進んでる。ね。もう限界だから」

笹間「そんな冷たいこというなよ。誰にだって間違いはあるだろ」

晴美「父さん何言ってるの？大火事になってもおかしくなかったんだよ。父さんもポツト半分溶けるまで気付けなかったってことだよ」

笹間「わしは今まで通りがいいんだ。何も変えたくないんだ」

晴美「自分のことばかり考えないで。父さん、母さんの事一回でも考えたことある？」

笹間「晴美・母さんの頭どうにかしてくれ」

晴美「だからお医者さんに・・・」

笹間「違う・頭臭うから・ずっと洗いやしない」

晴美が美津に近づき髪の毛に触れる。

髪の毛はべとべととしている様子。

晴美「母さん、頭洗ってないの？父さんがそう言ってるけど」

穏やかにソファーに座っていた美津がキッと笹間を睨み、

美津「毎日お風呂に入って洗ってます。変なこと言わんといて」

笹間が悲しげな顔で晴美を見る。

笹間「毎回このやりとり。この前なんか怒ってわしにリモコン投げつけた」

晴美が少しの間沈黙する。

晴美「とにかくケアマネージャー探して相談するから・・もう無理って本当はわかってるんでしょ？父さんも」

笹間が小さくうなづく。晴美がしゃがみ、美津と視線を合わせる。

晴美「母さん、私ね、今洗髪の練習したいの。母さん手伝ってくれる？母さんの頭洗わせてもらってもいいかな？」

美津がにっこり笑う。

美津「ふんふん、ほな洗いまひよか？」

晴美が美津を抱え込んで立たせる。

風呂場に向かう美津と晴美の後ろ姿。

○ 武藤家・リビングダイニング

晴美がスーパーの袋を下げて入ってくる。ダイニングのテーブルの上に布できっちり包まれた弁当が置いてある。

○ 武藤家二階

晴美が階段を上がってくる。ドアをノックする。返事がない。もう一度ノックする。少し待ってドアを開ける。

○ 武藤家・二階・亮輔の部屋

武藤亮輔(16) がベッドで本を読んでいる。部屋のドアが開き晴美が顔を出す。

晴美 「亮輔、今日も行かなかったの？」

亮輔、本から視線をはずすことなく、

亮輔 「・・・あく・・・」

とだるそうに言う。

晴美 「朝から何にも食べてないんでしょ？お弁当せつかく作ったんだから冷えてるけど

これ食べてよね」

亮輔 「・・・わかった」

晴美「じゃ、お茶入れてあげるからおりて来なさいね」

亮輔「うん、わかった」

晴美がドアを閉める。亮輔が本から視線をはずし、ドアの方を見る。晴美が階段を下りる足音が聞こえる。

○車ファミリーセダン・車内

武藤真澄(47)が運転している。助手席に晴美が座り、窓から流れる外の景色をぼんやり見ている。

武藤「でもよかったじゃないか・グループホーム見つかって。あと8日だね。専門家に任せちゃえばだいぶ安心だろ」

晴美が武藤の方に振り返る。

晴美「ほんと感謝してる・ここ数か月間、土日、ずっとこの道通ってたよね。休みが休みじゃない」

無言でうつすらとほほ笑む武藤の横顔。その微笑みが、えっ、という驚きの表

情に変わる。

武藤「あの横断歩道からはずれてふらふら渡っている人、お義母さんに似てないか？」

晴美「えっ、え？どの人・・・あっ、あー母さんだ！大変！」

武藤が車を歩道に乗り上げて留める。

○住宅街・公園通り

晴美が車から降りてくる。一目散に美津のもとに駆け寄る。

晴美「お母さん！・・・あっ・・・」

晴美が美津の両肩をつかみ、視線をゆっくり下げる。美津の下半身は素肌をあらわにしている。何もはいていない。晴美が着ていたブラウスを引きちぎって脱ぐ。ボタンがいくつか跳ねて道路に転がる。キャミソール姿の晴美がブラウスを美津の腰回りに巻きつける。

○武藤家・リビングダイニング（夜）

晴美がダイニングテーブルに座りぼんやりしている。ソファでテレビを観ている武藤が晴美の方に振り返る。

武藤「な、車に轢かれなかっただけでもよかったじゃないか」

晴美「お洒落な人だったのよ・・ちよつと見栄っ張りで、同窓会にはいつも新しい洋服着ていくような・・」

武藤「病気なんだから。本人わかってないよ」

晴美「かあさんが壊れてく・・かあさんじやなくなっちゃう。大切にしても壊れちゃう・・みんな壊れちゃう・・」

晴美が一瞬天井を見上げ、両手で顔を覆う。

○グループホームひまわり畑・美津の個室
「笹間美津」というネームプレートが個室部屋入口に貼られている。部屋のドアが開いている。部屋の中では武藤と晴美が段ボールから荷物を出してい

る。美津がベッドの上にちよこんと正座している。美津が何かに気付いたような表情をする。

美津「すみませんね〜・あなたご家族は？」

晴美がじっと美津をみつめる。

晴美「お母さん、私お母さんの娘でしょ？」

美津「そうなん？うちの子は小さいんよ。二階で遊んでるの」

晴美がムキになる。

晴美「だから・・・その小さかった子が大きくなつてえ・・・」

武藤が晴美の肩を引つ張る。晴美が悲しげな表情で武藤を見、黙る。

○ 陶芸教室内

晴美と菊田久代(51) が作業台で隣同士で土をこねている。

久代「よかった。ずいぶん来ないから辞めちゃうのかと思った。お母様、大丈夫そう？」
晴美「ん〜・まだ三日目だからわかんない。」

けどもう私のこと娘ってわかんないんだよ。
環境が変わったところで何にも感じないじ
やないかって・・・」

久代「なんか悲しいね・・・家の姑みたいに米
寿目前で、あんだけはつきりして気が強い
のも困りもんだけどね」

晴美「思い出がね・・・共通の思い出が全部消
えちゃった」

晴美が鼻からふーっと長めの息を吐き、
止まっていた手を動かし土をこね出す。

○ 武藤家リビングダイニング（朝）

電話が鳴る。晴美がエプロンで手を拭
きながら受話器を取る。

晴美「はいそうです。・・・えっ！・・・わか
りました。すぐにそちらにうかがいます」

○ グループホームひまわり畑（朝）

晴美が美津を抱き寄せてソファアに座
っている。美津は晴美の肩にもたれ、

その表情はやわらかい。晴美と美津の向かいに簗島琴音(42) が固い表情で話している。

琴音「・・・こういう事はよくあるんです。環境の変化に戸惑い、ストレスをため込んで異常行動に走るケースは・・・」

晴美「でもぬいぐるみの耳をちぎって食べてしまうなんて・・・」

晴美が美津を見て、その手をさする。

琴音「お通じに出れば問題ありません」

晴美「私・・・母はもう環境の変化に気づく能力もないって思っていました」

琴音「物事の関係性がわからなくなっても、親しい人や馴染んだものに安心感を感じるようです。今の美津さん、娘さんに抱かれて、とても平和な表情をなさってますよ」

晴美が美津の表情をじっと見る。美津がゆっくりと晴美の腕から自分の身体を起こす。

美津「あなた・・・それ似合ってるわ。きれい

よ。」

美津が晴美の着ている小花模様のブラウスを触る。晴美の二の腕を触っていた美津の手が、肩首を伝い、晴美の頬に触れる。

美津 「どうしたの？ ・ ・ 大丈夫よ。ね大丈夫」

晴美が驚いた表情で美津を見つめる。

晴美の頬に置かれている美津の手に、晴美の涙がたたって流れる。

晴美 「母さん、ごめんね ・ ・ ・」

晴美が美津の胸に顔をうずめる。美津がぼんやりした表情で、晴美の頭をいつまでも撫でている。

完